

令和6年産水稻における高温対策のポイント

令和6年6月27日
農業技術研究センター

今夏も暑くなると予報されています。高温障害の軽減には、葉色診断に基づく施肥管理が最も重要です。特に暑さに弱い「彩のかがやき」は高温対策を実施する重要な時期となっています。ほ場を良く見て回り、葉色に応じた施肥管理などを徹底しましょう。

1 気象予報

6月20日気象庁発表の1か月予報では平均気温は80%の確率で高いと見込まれています。なお、5月20日～6月20日の熊谷の日平均気温は平年に比べ1.4℃高くなっています。

6月21日に関東地方も梅雨入りとなりましたが、梅雨明けは平年並と見込まれています。いよいよ夏本番も間近です。

2 高温対策のポイント

(1) 早植栽培（5月移植）の穂肥施用

農業技術研究センターの5月1日植「コシヒカリ」や5月21日植「彩のかがやき」は、高温傾向により生育は旺盛で、分げつの発生も多くなっていることから、葉色は「4」（群落）程度と平年より淡く推移しています（6月20日現在）。

ほ場をよく観察し、葉色が「4」程度を下回った場合は、追肥を行きましょう。

「彩のかがやき」：出穂前23～22日頃に窒素成分で3kg/10a程度

「彩のきずな」：出穂前25～23日頃に窒素成分で3kg/10a程度

一発肥料体系においても高温で推移しているため緩効性肥料の溶出が早まり、穂肥としての効果が不足する可能性があります。このため穂肥施用時期に、葉色が「4」（群落）を下回った場合は、上記に沿った追肥を行きましょう。

詳しくは、農業技術研究センターHP掲載の「彩のかがやき」や「彩のきずな」の栽培指針・栽培暦をご覧ください。

(2) 普通期栽培（6月移植）の中間追肥

高温等により葉色が「4」を下回った場合は、追肥を行きましょう。

「彩のかがやき」：移植後30～35日頃に窒素成分で2kg/10a程度

「彩のきずな」：移植後20～25日頃に窒素成分で1kg/10a程度

(3) 登熟期間の水管理

出穂期以降は、田面近くの「うわ根」が活動の主体となるので、根の活性維持のため、出穂後7日以降は間断かん水を行い、1週間を1サイクルとし、湛水と断水を3～4日で切り替えると良いでしょう。強い断水は根に物理的なダメージを与え養分吸収を阻害するので避けます。

また、高温が続くときは夕方以降に入水を行うことで田面の温度を下げる効果が期待できます。

3 イネカメムシの防除

不稔粒や着色粒など著しい被害を与えるイネカメムシの防除時期の目安は、1回目が出穂期から穂揃期、2回目が穂揃期の7～10日後となります。防除は2回行うことが望ましいですが、1回しか薬剤散布できない場合は「出穂期から穂揃期」の防除を優先してください。